交流会と日本語勉強会

日本語スピーチ発表会に先立ち、「日本の大学生との交流会」と「日本語勉強会」が行われた。初のオンライン開催はどうだったか。

教科書にはない学生言葉

早稲田大学国際学生友好会（WIC：「ウィック」）は、日本で学ぶ留学生との国際交流サークル。60年以上の歴史をもつ。そんなWICの皆さんが、３つのイベントを企画してくれた。

１つ目はサイコロトーク。小グループに分かれて、サイコロで出てきた数字によって話題を決める。

- 好きな食べ物
- おすすめスポット
- 最近買った高い買い物
- 日本の好きなところ
- 将来の夢は？
- 明日、世界が終わるなら何したい？

これなら話題を手軽に決められる。１つの話題が尽きても次の話題が出てくる。同じ世代同士、すぐに打ち解けて話が弾んできた。

２つ目はビンゴゲーム。約50人の参加者全員で行う。みんなが好きな色、好きな日本食、行ってみたい国を15の選択肢から９つ選んで、タテ３×ヨコ３のマスの中に記入。あとはビンゴと同じ。マス目が９つしかないので、すぐに「リーチ！」「ビンゴ!!」と手が上がる。景品もないのに、なぜか盛り上がる。

３つめはジェスチャーゲーム。再び小グループに分かれて、それぞれリーダーから、「猫」「象」「悲しい」「ショック」などのお題が。「せーの」で一斉にジェスチャー。全員がそろって同じポーズをすることもあれば、かなり違う人も。ますます熱が入ってきたところで交流会は終了。

WICの皆さんはコロナ下にあってもオンラインを駆使して数多くの国際交流を行っているせいか、とても自然な受け答え。スピーチ発表を前に緊張気味だった発表者たちもリラックスして笑顔に。「楽しかった！」 特に「授業では習わないような日本語が聞けたのが良かった！」。

「着る」と「履く」の違いは？

日本語勉強会の講師は、ヒューマンアカデミーの廣田小百合先生。

最初に２グループに分かれてそれぞれのグループ内で「自己紹介」。「私の名前は○○です」「趣味は」……。続いて「他己紹介」。全員の前で同じグループだった他の人の紹介を行う。「この人は○○さんです」「趣味は日本のテレビドラマです」。

次は「私のまちについて話しましょう」。みんなには前もって

スライドを準備してもらった。そのスライドを使って自分の国や住んでいる街を紹介する。「アンコールワットにはきれいな彫刻がいっぱい」(カンボジア)、「ルソン島は棚田が有名です」(フィリピン)など写真付きの名所案内や、「多様性を互いに尊重し合っている」(インドネシア)、「季節は雨季と乾季の２つだけ」(ラオス)など、それぞれの国の特徴がよく分かる。

民族衣装の話題になったところで、廣田先生から「着る」と「履く」の使い分けについて解説。セーター、ジャケットなどお腹から上は「着る」、ズボンや靴、靴下などお腹から下は「履く」。なるほど。日本人にも勉強になる。

「日本に行ったら一番したいことは？」との先生からの問いかけに、「ラーメン食べたい」「カラオケ行きたい」(自国にもあるが日本の曲が少ない)、「富士山と桜の写真を撮りたい」……。いつか必ず実現してほしい。

こうして、あっという間に日本語勉強会は終了。いつの間にか日本語が上達する充実した時間だったに違いない。

大きな副産物を発見

日外協　業務部主幹　**中野裕道**
(本プログラムコーディネーター)

コロナ禍のため昨年は中止。今年はなんとか開催したいとの思いで準備をしたが、やはり日本で行うことは難しく、オンラインで実施可能なプログラムのみでの開催とした。

早速各国の担当窓口に連絡し、オンラインで行う旨を伝えた。しかし、優秀者(参加者)を選出するための日本語スピーチ・コンテストそのものが中止となった国もある。また、多くの優秀者が実際に日本を訪れたいと思っている中、オンラインではほとんど参加してもらえないのではないかと不安も大きかった。それでも各国関係者の尽力のおかげで、最終的に５カ国から６人が参加することになった。

当日はメインプログラムであるスピーチ発表会に加え、ゲームやクイズを交えた交流会や、日本語勉強会を半日かけて実施した。

その場にいるからこそ感じるのと同じだけの熱量をオンラインで伝えるのは難しいかもしれない。それでも各国の関係者や家族・友人が、オンラインだからこそスピーチ発表を視聴できたことは大きな副産物だ。

プログラム終了後、アンケート形式で発表者の感想を聞いたところ、全員が楽しんでくれたようでほっとした。だが一方で、「やはり日本に行きたかった」という声もある。来年以降、どのようなかたちでの開催になるかは不透明だ。できれば日本をリアルに体感してもらう場を、また日本語を学ぶ同じ志をもつ仲間がオンライン上ではなくリアルな場所で同じ時間を共有する機会を提供したい。同時に、世界どこからでも参加・視聴できるというオンラインの利点も活かしたプログラムを実現できればと思っている。